

学生相談の苦渋

「ひそやかなる『ごころ』を見失わないために」

加藤 美智子

(大妻女子大学学生相談センター所長)

学生支援の拡充と期待・幻想

多くの大学は、近年、学生支援を最重要課題として取り組んでいる。学生部や学生課という名称が学生支援センターや学生サポートセンターなどに変わり、また、相談業務も、キャリアアカウンセリング、修学相談、学習相談、学生支援室、なんでも相談室、学生相談センター、学生相談室等々と窓口が多く設置されてきた。現在の学生支援の動向は、学生相談関係者としては喜ばしいものである。大学の中で、学生支援や学生相談を否定する人はいない。

大学をめぐる社会状況の変化によって、大学も教職員も

自己評価を迫られ、第三者評価に緊張感を募らせている。さらにはFD委員会による授業評価も行われ、大学全入時代の学生対応に大学教員は苦慮している。学生の不登校、授業欠席に敏感になり、学力向上に苦心し、アカデミックハラスメントやセクシャルハラスメントといった新しい認識も身につけなければならない。また、発達障害の学生や精神疾患を持つ学生への対応に戸惑いを隠せない教職員も多い。このような学生に対して専門家の意見を聞きたいとの要望も、学生相談担当者に寄せられる。学生相談担当者は心の専門家であるのだから、このような問題にすべての確に対応できるとの期待や幻想が持たれるのである。しか

し、当然のことながら学生相談は万能ではない。この教職員からの期待や幻想に全て応えられると錯覚してはならない。学生相談はすべての学生支援活動のうちの一つであるという認識が必要である。学生相談が学生支援の中心であると考えすぎることは慎重でありたい。専門家としての役割を果たしつつも、他の教職員とともに学生と向き合う姿勢を養いたい。

新しい学生支援によって不適応学生を出さない

大学が中学や高等学校のようにクラス担任制になり、出席を重視し、授業回数（半期一五回）の徹底が叫ばれ、授業中の私語に対する適切な指導が問われ、教授方法が問われる。また、保護者への成績通知や大学のカリキュラムや制度の説明が丁寧に行われ、保護者からのクレームにも敏感に対応することが求められる。これらも、学生支援として行われており、大学のセールスポイントにもなっている。そして、学生への積極的な支援はともすると学生管理になる危険も含み、学生の成長を妨げることもあると肝に命じたい。大学生は全員一八年以上生きてきていることを忘れず、その生きてきた力を信じる学生支援を考えたいと思う。

若手相談員を視野に入れた学生相談を

このたび（平成一九年三月）、独立行政法人日本学生支援機構より出された「大学における学生相談体制の充実方策について」は、学生相談体制全体を視野に入れ、現場感覚を活かし、実に明快、詳細に記述され、図表の表現も工夫されている。『大学のそれぞれの個性・特色にかんがみ、「教育の一環としての学生支援・学生相談」の再構築にご活用いただければ幸いである』という言葉を真摯に受け取りたい。しかし、立派な建物は、立派過ぎて近づき難い場合もある。経験ある教職員は、自らの経験をともに、言葉や図に示されている内容を、容易にイメージを伴って理解できるであろう。まだ経験が浅く若い教職員はどうであろう。このように多くの要素を咀嚼できるものであろうか。やるべきことが多くて大変と感じたり、何かをすることに気を取られ焦りを感じるのではないかと思うのは老婆心だろうか。心理臨床全体の中で、学生相談への従事を希望する人は少なくない。しかし、それは心理臨床家としてのステップと考えられている感がある。学生相談を自らの心理臨床の現場と位置づける臨床家を増やしていくことを目標

の一つとして考えておきたい。

三層モデルの現実

本報告書の基本的考え方にある、「学生支援の三階層モデル」による総合的な学生支援体制の考え方は、学生支援を全学的に取り組んでいく際に有効であると考ええる。第一層を日常的学生支援（学習指導、研究室運営、窓口業務等）、第二層を制度化された学生支援（クラス担任制度、アカデミック・アドバイザー、チュートリアル・システムなど）、第三層を専門的學生支援（学生相談機関、キャリアセンター、学習（学修）支援センター、保健管理センターなど）としている。学生支援を大学教育の一環として考え、専門的學生支援としての学生相談を全学生支援の下位に位置づける。そして、「大学が学生支援の基盤となる諸機能や諸設備を用意しておくことが不可欠である」とその基本をしっかり押えている。そのような基盤があって初めて学生支援は活性化される可能性を得るのである。現に、各大学は、この提言に沿うがごとくに、様々な諸機能や諸設備を用意し始めている。その業務を担う教職員はそれぞれが熱意を持って支援活動を展開させている。

しかし、その熱意が学生の負担になっているという事態も生じている。忍耐力や意思伝達力、行動力や協調性等、社会の中で生き抜くための基本的な能力の涵養に努めることを目的として、一年時から基礎セミナーなどと称して少人数制のセミナーが設置されてきている。また、キャリアセンターが企画する新入生のための就職セミナーやインターンシップが行われる。これらのプログラムに対して、不適応を起こす学生が出てきている。集団活動が苦手、人前で話をすることを苦痛に感じる学生は、入学早々に大変な事態に遭遇することになる。意欲が削がれ、精神的緊張を強いられ、失敗したとの意識が強くなってしまふ。やや発達障害が疑われる学生は、特に新しい環境に慣れるには時間が必要なものである。

少し事例を取り上げてみたい。ある学生は、高校時代から身体表現性の症状があり、普通高校から通信制高校に転校し、ようやく大学に入学し、不安ながらも意欲的に通学していた。しかし、五月の連休明けに、セミナーの個人発表があり、本人としては失敗したとの認識を持ち、引きこもってしまった。従来のようにセミナーが二年生や三年生になってからであったなら、その学生は、もう少し大学生としての自信を築き上げてからセミナーに臨めただろうと

思うし、ダメージも小さくて済んだであろう。

また、インターンシップを楽しみにしていた学生は、自分が希望する企業ではなく、全く興味もない企業に割り振られてしまい、一度登録したものを取り消すこともできず、どうしてもいかわからず悶々としているうちに、インターンシップの日がやってきて欠席した。企業に対して責任がある担当者に酷く怒られ、不満を表現することもできず、ずるずると不登校になり、他の授業も単位を落とすことになり、成績の不振を親に怒られ、行き詰まってしまい、うつ状態が悪くなってしまった。

大学が、多様化する学生への対応として、肝いりで用意したプログラムであっただろう。何も落ち度はない。しかし、そこに、ひそやかに“こころ”傷つく学生が生まれてしまっている。

第一階層や第二階層での学生支援においては、学生の個別ニーズに対応した学生支援を実現するには、さらなる創意工夫が求められるであろう。少なくとも、このようなプログラムから零れ落ちている学生が、気軽に足を運べる場所が存在するようになってほしいものである。

非常勤カウンセラーや、経験の少ない若手カウンセラーにとっては、重い重い課題であろう。

各階層の交流及び連携・協働が必須であり、さらに、異なる立場・視点からアイデアを出し、相互に尊重し合いつつ課題に共に取り組む協働は、各階層の相互理解を深め、支援の幅を広げ効果を上げる上で有効となり、学生支援の実践に基づく各階層間での「情報交換」も不可欠であると報告書には書かれている。全くそのとおりである。がしかし、このことを少し現実的に考えてみると、なかなか大変なことであると気づく。各階層の交流や連携、協働をどのような場で、どのくらいの時間をかけて行うのであろうか。異なる立場・視点からアイデアを出し合い、相互に尊重し合う為には、どのくらいの頻度と時間をかけてどのような話し合えばよいのだろうか。教職員は皆忙しい。教員はクラス担任やゼミ生の指導、各種委員会に学科会議、教授会、オフィスアワーと刻みのある仕事である。事務の方々も教務手続きや学生対応に時間を取られている。そして、学生相談員は、一日に一人五〇分程度の面接をおそらく四人五人は行うのが日常であろう。多いときは一〇人を超える面接をする日もある。連携や協働の為の時間を取ると、面接時間が減る。しわ寄せが翌日に行く。

連携・協働の死角

学生相談室は、大学の問題点に早く気づくことが多い。しかし、先のような事実を学内に報告することは思いのほか難しい。学生相談室関係者が学生委員会や教務委員会に定期的にメンバーとして出席できていると少し事情は違いかもしれない。大学の大きな潮流に沿った企画運営において、学生が酷く傷つき、躓き、落ちこぼれていると伝えることは、熱意を持って職務を遂行している教職員にとって受け入れがたい評価となる可能性があるからである。学生相談員も大学の教職員の一人である。大学側の事情も理解でき、教職員側の善意も理解できる。そして、傷ついてしまった学生の立場や“こころ”も理解できる。学生相談員は大学や教職員と学生の間で挟まれて動かなければならない。同僚である教職員を批判するのではなく、学生の傷つきを報告し、一人の学生の特別な問題ではないことを主張しなければならぬ。ハラスメントにかかわるとき、研究室内の人間関係にかかわるときも同じである。学生相談担当者は、しっかりと学生の立場に立っていることが重要であると思う。しかし、そのことが簡単ではない。まして、

さらに、心理面接に使う神経と会議で使う神経は異なるのではないだろうか。少なくとも筆者はそうである。面接の後すぐに会議、会議の後すぐに面接に入れるものだろうか。慌しく事務仕事をした後に面接室に入り、学生から「そんないい加減な面接ならば意味がない!!」と怒られたことがある。筆者の心身が面接仕様になっていなかったことに気づいてくれた学生だった。複数の相談員が在籍する相談室は、個別面接と他部署との連携・協働に参加することを分担することもできる。しかし、若い相談員が一人しかいない、あるいは週に一日か二日しか開設されていない相談室では、どのようにその業務をこなすのであろう。

日頃からの意識と時間と信頼形成に向けての努力が求められることは、報告書にも書かれている。米国では「インテーク、個人及びグループ・カウンセリング、及び危機介入のような直接的サービスは、恒常的に仕事量の六五％を超えるべきでない」という基準が妥当な目安と考えられているという(本報告書二二ページ)。また、一〇〇〇人から一五〇〇人に一人の専任カウンセラーという基準も米国にはあるそうだが、日本では三〇〇〇人に一人のカウンセラー配置を努力目標にしているようである。現任カウンセラーの経験から、是非妥当な基準を割り出してもらいたい

ものである。いずれにしても、このような専任カウンセラーの仕事量や仕事の種類に基準を設けるという発想が、素晴らしいと思う。さらには、個別面接とその他の業務の移行時間というものも重要な意味があると思われる。仕事量という点においては、もう一点、一人当たりの面接時間も検討に値する問題である。多くの学生にとっては、一時間程度の対話の時間があるということの意味は大きいと考えられ、従来一時間をめどに面接をしてきた学生相談員は多いと思う。しかし、忙しくなってくると、一人確実に一時間を取ることができなくなり、四〇分、三〇分と短縮する面接も出てきているのが実情だろう。どの面接は一時間、どの面接は三〇分などと工夫をしている方も多いだろう。一時間面接をすればよいというわけではないのは当然である。一時間一緒に居て、「自分の思いが伝わったかもしれない!」「どこか自分が受け入れられたかもしれない!」「新しい視点を発見した!」「よくわからなければど充実した時間だった」などの体感が残って欲しい。瞬間なる出会いが存在したかどうかが問われるとも言える。また、ある程度の関係性ができていれば、一〇分や一五分、あるいはほんの一〇二分で「今日の面接はよい」ということもある。顔を見るだけ、声を聞くだけでよいということさえある。それでも、

大学生というものは、多くを語り合いたい、人生を考えた、自分の話を聞いてほしいなどと、対話を求める存在ではないかとも思う。五〇分から一時間の面接時間をとれるゆとりある仕事をしたい。相談員の都合で時間の延長、短縮が行われることだけは極力避けたいものである。

専門性を磨く

専門的な学生支援としての学生相談担当者は、様々な心理的問題（摂食障害、自傷、発達障害、やる気のなさ、対人関係トラブル、性格の問題、人生や宗教の問題、進路への不安や恐怖等）の理解と対応、精神病理（うつ病、統合失調症、人格障害等）の理解と対応、投薬や睡眠など医療知識の理解、アカデミックハラスメントやセクシャルハラスメントの理解と対応、各部署との連携・協働、情報発信やそのための研究、各心理療法の理解と研修、などの専門性を日々研鑽し続けなければならない。必要なときに必要な知識と行動が取れるように準備できていなければならない。学生への対応は一人ひとり異なることを考えれば、いくら時間があっても足りないくらいである。学生相談員に時間的精神的余裕がなければ、とても学生のニーズに応じ

た専門的対応はできない。

学生相談の本質は

「学生相談とは」と考えていたときに夢を見た。立派な桐の筆筒がある。引き出しには何も入っていない。しかし、上の引き出しには隠し引き出しがある。そのことに気づいて、その中を見た。そこには五万円入っていた。「もっと多額のお金が入っているかと思ったのに!」と、周りにいた人々が不満を言う。五万円はたかが五万円、されど五万円である。夢から覚め、この桐の筆筒は学生であり学生相談かしらと思った。今時、桐の筆筒は珍しい。合板で見栄えのする筆筒が多い中、学生相談室にやってくる学生や学生相談は桐の筆筒ではないか。引き出しには何も入っていないが、表からは見えない隠し引き出しが存在する。この引き出しは存在するかどうか簡単には分からない。簡単に分かっては隠し引き出しの用をなさない。見つけた引き出しの中の五万円は、学生の可能性であろうか。この五万円をどう使うのか。簡単には決められない。

学生相談とは人的活動である。組織や体制が整っても、その中で人がどのようにあるかが問題である。人員の増加

がなかなか期待できない状況の中で、本報告書の実現が、学生相談担当者の過重労働にならないことを祈りたい。学生相談担当者の業務配分は、その担当者の力量、年齢、経験によって考えなければならぬ性質を持つ。

また、「ここ」の動きはひそやかであり、気づきにくい。「ここ」に気づくことから学生相談は始まる。「ここ」は目に見えないので、早い潮流に流されてしまいがちである。じっと目を凝らして、「ここ」を傾けて、耳を澄まして、学生と向き合いたいものである。

最後にもう一度確認をしたい。「ここ」の成長にはゆとり、時間、守りと抱え、覚悟と度胸と勇気がどうしても必要である。自立した人間に育つには、自覚的に立ち止まって考えることが必要である。そして、自ら感じ、考え、苦悩し、自分を信じ、他者を信じ、勇気を育て、勇気を見守り、試行錯誤と経験を重ねるといった、曖昧で抽象的な経験を積むことから始まるように思う。このことは、学生にも学生相談担当者にも当てはまることであろう。曖昧さは明快さに打ち負かされることも多いことを「ここ」に留め置きながら、学生相談について考え続けたいと思う。